

ライフリスク研究センター開設記念
連続シンポジウム

「リスク社会から安心ある心豊かな社会へ」

ライフリスク研究センターの開設を記念して、10月3日・10日の2日間にわたり、「リスク社会から安心ある心豊かな社会へ」をテーマに連続シンポジウムを開催した。両日とも約250人の聴衆が集まり活発な議論が行われた。

第1回目は寒梅館ハーディーホールで、スポーツがソーシャル・キャピタル（社会関係資本）といった人と人との絆と信頼を高める役割に焦点を当て、豊かな社会の構築のために果たすスポーツの役割について議論が行われた。基調講演は、日本サッカー協会名誉会長の川淵三郎氏から「夢があるから強くなる」というテーマで行われた。

キーノートレクチャーでは、本センターの松野光範氏、高知中央高校ラグビー部ゼネラルマネージャーの大八木淳史氏、山内直人大阪大学国際公共政策研究科教授からの報告がなされた。



また、クロストークでは、スポーツが豊かな社会の形成に繋がらない要因にまで踏み込んで議論が行われ、選手教育の必要性が示された。

明德館で開催した第2回目のシンポジウムでは、弁護士の住田裕子氏によ



る基調講演において、高齢者が直面しているリスクと不安について、豊富な事例をもとに、社会に内包されている支え合いの仕組みが変化することに伴う問題点が明らかになった。

続いてのパネルディスカッションでは、白波瀬佐和子東京大学准教授に本センターの橘木俊詔教授と埋橋孝文教授を交えて、「安心・安全社会を求めて－安心・安全社会を構築するための制度とは－」をテーマに議論が展開された。グローバル経済の進展によって、労働市場を中心に競争力を高めるための規制緩和が進んだことが、労働者をはじめとした国民のリスク増大をもたらしたことが橘木氏より提起され、白波瀬氏からは安心・安全が重要な問題となってきた背景に社会が「見えにくく」なっていることが述べられた。そして、リスクを低める主体としての家族と政府、そして企業が、どのようなバランスでどのような役割を果たすべきかについて議論が行われ、家族のリスク軽減機能が十分に発揮できるような制度改革と政策の必要性が明らかになった。特に低所得層に対するリスク低減に関しては、政府が大きな責任を果たすべきとの議論が行われた。

(ライフリスク研究センター)